

説明的文章教材の段落指導に関する一考察 —A小学校3学年 Y教諭の実践を通して—

宮城 信夫* 山田 香織** 石井 勉***

A Discussion of Instruction on Writing Paragraphs in Explanatory Writing Materials: The Practices of Ms. Y, a Third Grade Teacher at A Elementary School

Nobuo MIYAGI, Kaori YAMADA, Tsutomu ISHII

要旨 中学年の説明的文章教材の指導においては、しばしば形式段落を意味段落にまとめる指導が行われる。この指導にどのような意味づけがなされ、どのような方法論で行われるかという議論は、私見による限りあまりされていない。

こうしたなかで、A小学校のY教諭に代表される3学年教諭の実践は、多くの示唆に富むと同時に様々な問いかけを発するものであった。本稿はY教諭の授業実践から、文章全体を意味段落に分ける指導についての一つの方策を指摘した。

キーワード：意味段落 事実と意見 グループ活動 くらしと絵文字

1 問題の所在

(1) 学習指導要領の目的から

平成28年度の全国学力・学習状況調査において、沖縄県は小学校で全国平均を超え、高い水準を示した。現場教諭の授業改善と学校・家庭・地域一体となった取組により、着実に成果をあげている。今後はこうした水準を維持しつつ、学力構造の部分に焦点をあて、質の高い確かな学力の定着を目指していく必要がある。

さて学力構造に軸足をうつしたとき、教育現場では、校内研修のテーマに説明的文章教材を取り上げたものが多くなる傾向にある。学力の質を考えたとき、まず思考力・表現力・判断力の育成が注

視される。その際、国語科においては説明的文章教材がターゲットになる傾向にあるのである。

説明的文章教材が思考力・表現力・判断力の育成につながるかどうかの議論はここではおく。ただ説明的文章教材が筆者の論理を軸に展開されたものであり、筆者の思考の脈絡が反映された文脈を追いかけるといふ授業展開は、論理性の育成には大きく寄与するものと思われる。

こうしたなか、第3学年・第4学年の指導においては一般的に段落分けの指導がよくなされる。

まず、文章全体を形式段落にわけ、そのまとまりを意味段落として3つほどのまとまりに分けるのである。これは『小学校学習指導要領』の「第3学年及び第4学年」の目標「(3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。」¹⁾を受

* みやぎ のぶお 宜野湾市教育委員会

** やまだ かおり 宜野湾市立宜野湾小学校

*** いしい つよし 文教大学教育学部学校教育課程数学専修

けたものである。「読むこと」の指導事項として、「イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見の関係を考え、文章を読むこと。」²⁾ という文言があり、「段落相互の関係」という言葉が大きな目標の中に2箇所も出てくるのである。『小学校学習指導要領解説国語編』(平成20年)には、「目的に応じて中心となる語や文をとらえるなどして段落相互の関係を押さえることや、事実と意見との関係を読むことを示している」³⁾ とある。「B書くこと」においても「イ文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」とあり、読むこと書くことが有機的に関連させながら段落指導を展開しようとしているのである。

また「事実と意見」に関しては、次のように述べられている。「事実と意見との関係を考えることは、段落相互の関係をとらえる事においても必要なものであるとともに、段落内部においても必要なものであることに留意する必要がある。事実に対して、意見を表す語句、文、段落を取り出し、これを関係付けながら、筆者がどのような事実を原因や理由として挙げ、それについてどのような考えや意見を述べようとしているのかをとらえることが重要である。」⁴⁾ このように事実と意見を手がかりに、段落相互の関係を理解し、正確に読み取ることが求められている。またそれは、思考のまとまりにつながるものであり、書く活動においても大きな力を発揮するのである。

(2) 説明的文章教材における段落分け指導の実 際と問題点

こうしたなかで先の段落分けの指導が成されるのである。確かに、いくつかの形式段落を内容の上からひとまとめにした意味段落に分けることは、文章の構造や仕組みを理解する上で非常に重要な意味を持つ。書くことにおいても適切な段落の関係づけが身に付く事につながる。

では、段落を分ける指導にはどのような問題点

があるだろうか。『国語指導用語辞典』によると、「意味のつながりからひとまとまりにしたものを意味段落または大段落と呼ぶ。形式段落を意味段落(大段落)にまとめるときにのまとめ方には、種々の段階があり、また、観点の違いによって、そのまとめ方が異なってくる」とある。分ける観点によってまとめ方が異なるため、子どもたちに混乱を引き起こす恐れがあるのである。実際、この段落分け指導では、どのまとまりで分かれるかということで、多様な意見が噴出し、最後は教師側が強引にまとめていくという授業が非常に多い。なぜ、このまとまりで分けられるのかということもややした思っただけが児童に残り、何のために段落分けを行ったかという視点が欠落する。その結果「国語は意味がわからない」「国語は楽しくない」という印象だけが残ってしまう。

(3) A小学校3学年の取組

こうした段落分け指導で、示唆に富む実践がみられた。A小学校の3学年の取組である。G小学校は各学年3クラスから5クラスの中規模の学校である。若手教師の授業力の高さには、定評があり、職場のOJTがよく機能している。管理職が職場環境作りに心を砕き、サーバントリーダーとして教職員を支援しているのも一因と思われる。また、教職員が子どものために授業に打ち込む学校文化が形成されていることも重要な要因の一つとしてあげられるであろう。こうした様々な要素が絡み合い、優れた授業実践がみられる学校である。今回の授業者は教職3年目のY教諭である。子どもたちの発言を引き出すのが非常に上手く、その発言をつないで質の高い授業を構築している。こうした授業力の高さには、学年主任の教諭を中心に学年の3名の教諭との教材研究、研究主任など支援が背景としてある。次に示すのは、授業が行われた指導案と教材である。

〈教材〉くらしと絵文字 大田幸夫 「教育出版3年下」

- ①私たちは、道で左のページのような絵をよく見ますね。横断歩道の歩行者信号に使われている絵です。アのときは、「止まれ」イの時は「進め」という意味を伝えます。このように伝えたいことをいろと形にして、見ただけでわかるようにした記号を絵文字と言います。
- ②絵文字は昔から使われてきました。たとえば、お茶屋さんや鍵屋さんは、木に彫った茶壺やかぎを、店先につるしました。道しるべには、方向を示す指印が彫り込まれました。絵文字は時代を超えて多くの人々の暮らしに役立ってきたのです。
- ③現在私たちの毎日のくらしの中には、たくさんの絵文字が使われています。車の運転席に座るとヘッドライトやワイパーの絵文字が目に入ります。道路や駅・空港など大勢の人々が集まる場所でも電話やトイレなどの色々な絵文字を見ることができます。洗濯やアイロンかけの仕方など、衣類の取扱い形も絵文字によってわかります。
- ④このように、たくさんの絵文字が使われているのは何故でしょうか。絵文字の特長から考えてみましょう。
- ⑤絵文字の第一の特長はその絵を見た瞬間に、その意味がわかるということです。
- ⑥ウの絵文字は、テレビなどの天気予報でよく見るものです。わたしたちは、これを見た瞬間に、それぞれの地方の天気予報を知ることができます。エの絵文字は、壊れやすい品物を送る箱に貼ってあるものです。「壊れやすいものなので、取扱いに注意して下さい」という意味がわかりますね。
- ⑦絵文字の第二の特長は、伝える相手に親しみや感じさせる、ということです。
- ⑧オの絵文字は、万国博覧会など、人がどっと集まる場所で使われたものです。泣いている子どもが「迷子」を表していることは、すぐわかりますね。「おさんが迷子になった方や迷子を見つけた方は、どうぞこちらへ連絡して下さい」という、やさしい心遣いが伝わってくるように思われます。
- ⑨動物の足跡の絵文字をたどっていくと、その動物に会える動物園もできました。道に記された動物の足跡をたどっていくのです。子どもたちは、探険をしているような楽しさを感じることでしょう。カの絵文字は、アメリカのある動物園のものです。
- ⑩絵文字の第三の特長は、その意味が言葉や年齢などの違いを超えてわかるということです。
- ⑪デパートや映画館などで、キのような絵文字を見たことがあるでしょう。この絵文字は、日本全国から集まった三千点をこえるデザインの中から、煙の中での見え方の実験などを行って、選ばれたものです。この絵文字は、国際会議でも一番良いとされました。「地震や火事の際は、ここから逃げなさい」ということが、外国の人々にも、幼い子どもたちにもすぐわかります。言葉や年齢などのちがう人でも、絵文字を使えば、伝えたいことが同じようにわかるのです。
- ⑫絵文字の特長をこのように考えてくると、わたしたちのくらしの中で絵文字がたくさん使われている理由がはっきりしてきます。
- ⑬これからの私たちのくらしは、外国との交流を抜きにしては成り立ちません。大勢の人が海外を旅行したり、日本に来たりします。これまで以上にたくさんの品物や情報も世界中を行き交います。絵文字は、様々な場面で、大切な役割を果たすこととなります。
- ⑭最近では身のまわりの機械に、上手で正しい使い方を、絵文字で分りやすく示しているものが増えていきます。また、工場などの危険な場所では、絵文字で安全や注意を呼びかけるようになってきています。さらに同じ意味には共通の絵文字のデザインを使おうという、国際協力の動きも進んでいるのです。
- ⑮絵文字は私たちのくらしを便利で楽しく、安全にしてくれます。そればかりか、世界中の人々がもっとわかり合い、つながりを深め合うのにも役立つことでしょう。

<指導案>

1 単元名 「絵文字をつくって説明しよう」 教材名 「くらしと絵文字」

2 単元目標

- 絵文字に興味を持ち、絵文字の特長をとらえて自分なりの絵文字を作っている。 【関・意・態】
- ◎ 目的に応じて中心となる語や文をとらえて、段落相互の関係を考えて読んでいる。 【読む イ】
- 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読んでいる。 【読む エ】
- 書こうとすることの中心を明確にし目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く。 【書く ウ】

3 単元について

(1) 教材観

本教材は、日常生活の中で目にする絵文字の特長について、具体例を挙げながら説明した文章である。児童は生活の色々な場面で絵文字に接しているため、身近で親しみやすい題材である。本教材の中で、「絵文字」の定義や役割を知ることで、なにげなく目にしている絵文字に新たな視点を持つことになるだろう。

「くらしと絵文字」は、15の段落からなる説明文で、『絵文字とは何か』、『絵文字の特長とその具体例』、『これからの絵文字についての筆者の考え』が大きなまとまりで書かれている。また、それぞれの段落の役割が比較的はっきりしており、段落相互の関係や文章全体における段落の役割を考える学習に適した教材である。

(2) 児童観

①単元・教材に対する児童観

3年生で学習した説明文『めだか』では、「段落の要点に気をつけて読む」ことを行った。題名に関係する言葉や何回も出てくる言葉（キーワード）を手がかりに、段落のなかの中心となる文を見つけながら、その段落の大事な部分をつかむことができるようになってきた。また、要点をまとめる際、体言止めで要点を書くことにも慣れてきた。さらに、文章構成に着目しながら、「始め・中・終わり」に分ける学習もしてきた。

②児童の実態

質 問	回 答	
①国語の勉強は好きですか。	はい 62 (%)	いいえ 38 (%)
②国語のどんな勉強が好きですか。 (複数回答可)	ア 話す・聞く 27 (%)	イ 文章を書く 24 (%)
	ウ 文章の読み取り 32 (%)	エ 言葉のきまり 29 (%)
	オ 音読 38 (%)	カ 漢字の学習 52 (%)
③話すこと(発表)は好きですか。	はい 41 (%)	いいえ 59 (%)
どんなことに気をつけていますか。 (複数回答可)	ア 大きさや速さ 58 (%)	イ 聞き手を見る 36 (%)
	ウ 言葉づかい 64 (%)	エ 順序よく 52 (%)
	オ とくに気をつけていない 12 (%)	
④聞くことは好きですか。	はい 84 (%)	いいえ 16 (%)
どんなことに気をつけていますか。 (複数回答可)	ア 話し手を見る 68 (%)	イ 最後まで聞く 67 (%)
	ウ 相手の伝えたいことを考えて聞く 52 (%)	
	エ 自分の考えと比べながら聞く 50 (%)	
	オ とくに気をつけていない 12 (%)	
⑤書くことは好きですか。	はい 64 (%)	いいえ 36 (%)
どんなことに気をつけていますか。 (複数回答可)	ア つなぎ言葉 54 (%)	イ 順序の言葉 57 (%)
	ウ 既習の漢字を使う 50 (%)	エ 文末をそろえる 43 (%)
	オ とくに気をつけていない 15 (%)	
⑥読むことは好きですか。	はい 68 (%)	いいえ 32 (%)
どんなことに気をつけていますか。 (複数回答可)	ア 最後までしっかり読む 62 (%)	
	イ 分からない言葉は辞書で調べる 35 (%)	
	ウ 気持ちを想像しながら読む 47 (%)	
	エ 説明していることを考えながら 48 (%)	
	オ とくに気をつけていない 18 (%)	

アンケートの結果から62%の児童が「国語を好き」と答えている。漢字の学習（52%）や教科書を読んだりする学習（38%）を好んでいる児童が多いことが分かった。しかし、作文や説明する文章を書く学習（24%）、自分の考えを話す・相手の考えを聞くこと（27%）、言葉のきまりや使い方（29%）を好きと答えた児童は少ない結果になった。

『話すこと（発表）』においては、好きではないと答えた児童の割合が59%という結果であった。このことから、学年の児童の多くが、大勢の前で話すこと（発表）に抵抗を抱いていることが見て取れる。『話すこと』が好きではない理由として、「恥ずかしいから」、「読むのが嫌い」、「間違えたら嫌だから」等の回答の児童がほとんどであった。発表するときに、言葉遣い（64%）や声の大きさ・速さ（58%）を、気をつけている児童の割合は高めだが、聞き手を見て話す（36%）ことを意識している児童は少ない傾向が見られた。

『聞くこと』については、84%の児童が好きと答えており、「いろいろなことが分かるから」、「新しいことに気づくから」などの理由を筆頭に、多くの肯定的意見が児童からでていた。この結果より、聞くことから学びたいという意欲がうかがえる。反面、伝えたいことを考えながら聞いたり、自分の考えと比べながら聞いたりしている児童は、50%前後と多くはないことが分かった。

『書くこと』については、64%の児童が好きと答えている。好きだと答えた主な理由としては、「書くのは楽しい」、「書くと相手に伝わるから」、「色んなことが書ける」等があがっていた。好きではないと答えた児童の意見としては、「めんどくさい」、「手が疲れる」、「難しい」等の回答が多く見られた。つなぎ言葉や順序を表す言葉を使う、既習の漢字を使う、文末をそろえるなどに気を付けながら書いている児童も少なかった。

『読むこと』については、70%近い割合の児童が好きだと答えている。だが、読むときに気をつけていることは「最後までしっかり読む」と答えた児童が62%と一番多かっただけであり、残りの項目においては50%下回る割合であった。このことから、児童の大半は、登場人物の心情・気持ちや筆者の考えを深く考えながら読んでいるわけではないということが分かった。

（3）指導観

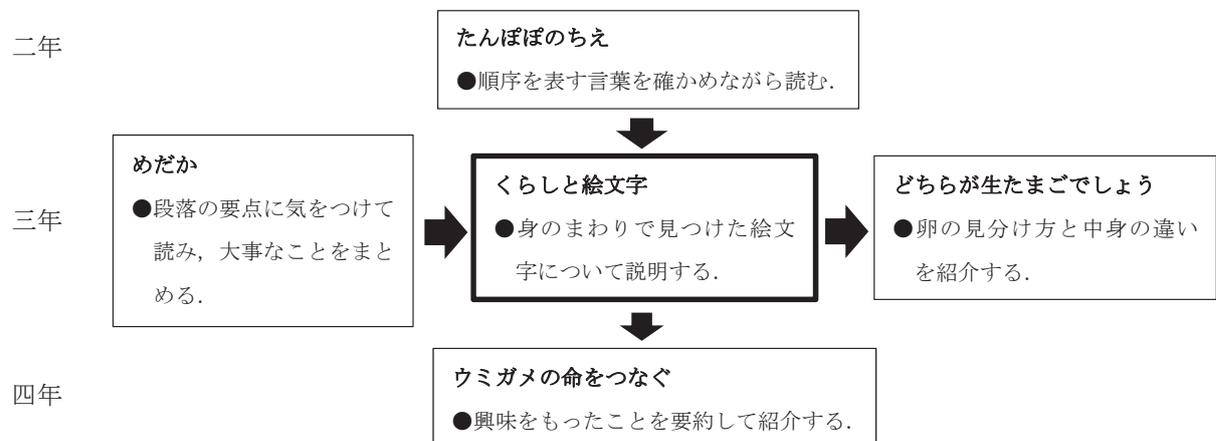
本単元では、児童が意欲的に学習に取り組むことができるように、自分で作った絵文字を説明する活動を設定した。

第1次では、教師が作成した絵文字とその説明文をつかって、学習の見通しを持たせる。この際、新出漢字の確認や、分からない言葉の意味調べの時間を設けて、スムーズに読み取りの学習に入れるようにしたい。

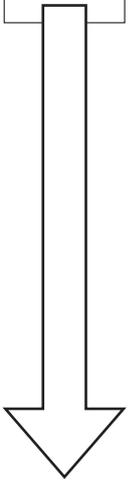
アンケートの結果から、「説明していることを考えながら読む」児童の割合が低い傾向にあることがわかった。ゆえに、第2次では、接続詞や段落の始めの言葉、抽象的・具体的な文に注意しながら、段落ごとに中心となる語や文をとらえて要点をまとめさせていきたい。さらに、意味段落に分け、小見出しをつける活動を行うことで段落相互の関係をとらえさせるようにしたい。

第3次では、オリジナルの絵文字を作成し、それを説明する文章を書く活動を行う。教材文での学習を生かして説明文を書かせるようにしたい。その際、書くことが苦手な児童もいるため、説明メモを用いながら、自分の考えを整理してから文章を書く活動につなげていくことにする。

〈学習内容系統図〉



4 指導と評価の計画（全9時間）

次	時	学習活動		指導上の留意点	評価方法
第一次	1	・教材文を読み、学習内容の見直しを持つ。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 並行読書 絵文字や記号について書かれた本を読もう。 </div> 	<ul style="list-style-type: none"> ・題名から内容を予想させる。 ・「絵文字をつくって説明する」という学習の見直しを持たせる。 	【関】学習の見直しを持ち、説明的文章を読むことに意欲を持っている。（発言）
	2	・新出漢字の練習やわからない言葉の意味調べをする。		<ul style="list-style-type: none"> ・読み取りの学習で押さえたい語句についても調べさせる。 	【関】興味をもって調べ学習をしている。（ノート・観察）
第二次	3	・第1段落から第3段落までを読み、絵文字の定義やくらしの中で役立っていることを読み取り、要点をまとめる。		<ul style="list-style-type: none"> ・段落の中心となる語や文（中心文）を見つけ、要点をつかませる。 ・時を表す言葉に着目させ、時をこえて絵文字が役立っていることに気づかせる。 	【読】絵文字の定義を読み取り、要点をまとめている。（ノート・発言）
	4	・第4段落から第12段落までを読み、絵文字の3つの特長を読み取り、要点をまとめる。		<ul style="list-style-type: none"> ・挿絵や図と、本文を照らし合わせながら読ませる。 ・抽象的に書かれた段落と具体的に書かれた段落の違いに気づかせる。 	【読】抽象的な部分と具体的な部分に注意しながら、絵文字の特長を読み取っている。（発言・ノート）
	5	・第13段落から第15段落を読み、これからの絵文字について読み取り、要点をまとめる。		<ul style="list-style-type: none"> ・時を表す言葉からこれからの絵文字について書かれていることに気づかせる。 	【読】これからの絵文字の役割について読み取っている。（発言・ノート）
	6 本時	・教材文を大きなまとまりに分ける。		<ul style="list-style-type: none"> ・キーワードや接続詞を手がかりに、「始め」「中」「終わり」に分けさせる。 ・第15段落と他の段落のつながりに気づかせる。 	【読】筆者の考える絵文字の果たす役割について読み取っている。（発言・ノート）
第三次	7	・絵文字を作って、説明メモを書く。		<ul style="list-style-type: none"> ・絵文字の定義を再確認する。 ・絵文字の特長を踏まえながら、考えさせる。 	【関】絵文字の特長をとらえて、自分なりの絵文字を作っている。（ワークシート）
	8	・絵文字を完成させ、説明メモをもとに、自分でつくった絵文字の説明文をかく。		<ul style="list-style-type: none"> ・説明メモを用いて、自分の考えを整理しながら、説明文を書く。 	【書】「始め・中・終わり」に気をつけて、説明する文章を書いている。（ワークシート）
	9	・絵文字発表会をする。		<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの絵文字がどの特長なのか考えながら聞かせる。 	【関】友達につくった絵文字に興味を持ちながら、発表会を楽しんでいる。（感想・観察）

5 本時の指導「くらしと絵文字」(6/9時間)

(1) ねらい

段落のつながりを考えながら、「始め」「中」「終わり」に分ける。

(2) 本時の評価規準

評価の観点	読むこと
評価基準	キーワードや接続詞をもとに、「始め」「中」「終わり」に分けている。
評価方法	授業内：ノート・発言 授業後：ノート・自己評価

(3) 本時の工夫点

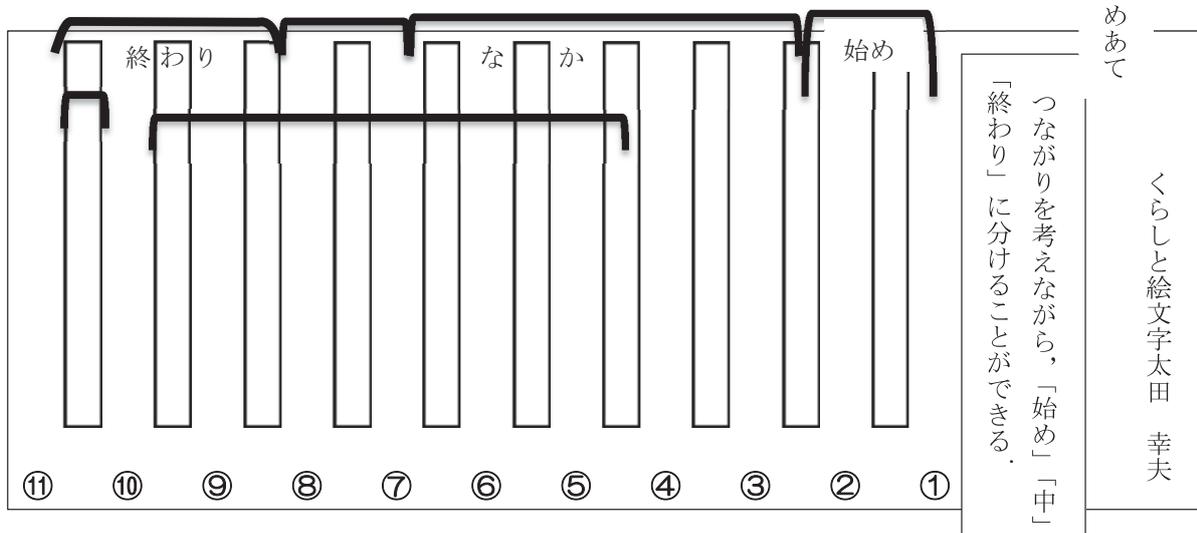
場面	工夫点(手だて・方法)	理由
前時までの振り返りと本時の確認をする。	これまでの段落の要点を掲示する。	全員で流れを確認し、学習を進めやすくする。
始め・中・終わりに分ける。 (個人)	要点をまとめてきたワークシートを活用する。	自分の意見を分かりやすくする。
始め・中・終わりに分ける。 (グループ)	どのように分けたのかをワークシートにまとめさせる。	根拠をもって発表させる。
⑮段落と他の段落との関係をまとめる。	前時までにまとめてきた短冊を本文と照らし合わせる。	⑮段落が他の段落とつながっていることを分かりやすくする。

(4) 本時の展開(6/9時間)

	学習活動・内容	・予想される児童の反応	指導上の留意点 ◎評価
導 入	1. 前時までを振り返る。 2. 本時のめあてを確認する。		・掲示してある、要点を確認する。
	つながりを考えながら、「始め」「中」「終わり」に分けることができる。		
展 開	3. 「始め」「中」「終わり」に分ける。 ・個人で考える ・グループで話し合う	☆段落のつながりを考えながら、3つのまとまりに分けてみましょう。 ・「始め」はどこまでだろう・・・ ・④～⑫段落までが「中」かな ☆まとまりに名前をつけてみましょう。 ・はじめは絵文字のしょうかい ・⑫までは特長について	・要点をまとめたワークシートを使って、段落の内容を考えながら、分けさせる。 ・各まとまりに題名(小見出し)をつけさせる。 ・グループで考えをまとめ、根拠をもってまとまりに分けるようにする。 【読】段落のつながりを考えながら、3つのまとまりに分けることができる。(ワークシート)

<p>展開</p>	<p>4. グループの考えを発表する.</p> <p>5. 全体で「始め」「中」「終わり」の分け方を話し合う.</p> <p>6. ⑮段落(まとめ)について話し合う.</p>	<p>☆終わりのまとまりはどこからでしょうか.</p> <p>☆筆者の一番言いたいことが書かれているのは何段落ですか.</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ考えのグループはまとめて発表して、考えを整理する. ・接続詞やキーワードから、④～⑫が「中」のまとまりであることをおさえる. ・「終わり」のまとまり(⑬～⑮)に筆者の考えが書かれていることを確認する. ・⑮段落が他の段落とつながっていることに気づかせる. <p>【読】筆者の考える絵文字の果たす役割について読み取っている。(発言・ノート)</p>
<p>まとめ</p>	<p>7. 学習のまとめをする.</p> <p>8. 自己評価と次時の学習の確認をする.</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・感想と自己評価を書かせる. ・学校が楽しくなるような絵文字を作ることを再確認する.

6 板書計画



2 授業の実際と考察

(1) 授業の実際

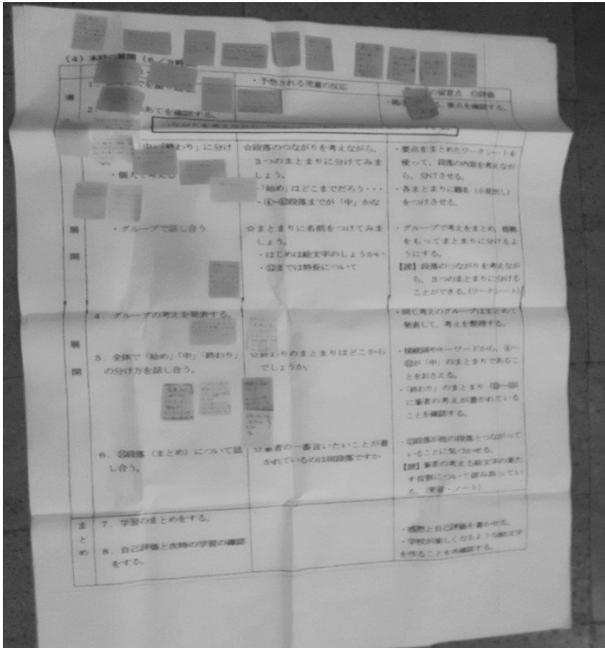


図1 授業研究会の資料

図1は、授業研究会で学年がまとめた資料である。良かった点、改善点などが付箋紙で色分けされている。授業前半に青色が集中し、非常に見学者の評価が高かったことがわかる。たしかに授業前半には、全ての児童が集中し、質の高い学びが成立していた。しかし展開部になると、赤色の付箋紙が出てくる。ここでは参観者の意見が賛否分かれているのである。ではどのように授業が進行していったのだろうか。

T: 「はじめ」をわけます。「はじめ」は一緒にやりましょうね。

C n: はい。

T: 一段落から、どの段落までが「はじめ」になりそうかなあ。考えてね。

C 1: 1から4までです。

T: 1から4までになりそう? 同じって言う人。

(4名挙手)

T: じゃあ違うかなあって言う人。

C 2: 1から3までだと思う。

T: 理由も言える?

C n: 言える、言える。

C 3: 「めだか」の時も、問いから始まったから、これも問いから「なか」が始まった。

T: ということは、1から3が・・・

C n: はじめ、同じ

T: では1から3が「はじめ」でいいですか?

C n: はい。

このように、「はじめ」と「なか」を分ける際に活用されたのは、前単元の説明文「めだか」の分け方である。腑に落ちていない表情の児童も何名かいたが、ここは時間を割くべきではないという授業者の判断で進行していく。しかし全体で1から3までが「はじめ」ということは強く確認されていった。

T: (板書後) 「はじめ」が分けられました。次は?

C n: 「なか」「終わり」

T: そう、自分で考えてもらいます。さっきと同じように線を引いて、その後にそのまとまりに名前を付けて下さい。このまとまりはこんな名前になるだろうなという名前を付けて下さい。できる人はそこまで。分ける所まではみんなやります。



図2 グループ学習の様子

こうして分けたワークシートをもとにグループで話し合うのである。各自の判断で意味段落に分け、その意味段落の要点をまとめ話し合いに望むことを授業者は想定している。

グループでの話し合いでは、それぞれ各自の分け方を述べるに留まり、「僕はこう思う」の主張ばかりで意見がなかなかかみ合わない。こうした光景は実はよく見られるものである。分け方の判断基準が個々の主観に任せられているため、こうした光景が生まれる。ただこの学級では前単元の学習が非常に有効に機能しており、そのまとめ方を踏襲した意見が多数を占めた。他の意見とぶつかったときには、「じゃんけんで決める?」「神様の言うとおりにする?」などと根拠の少ないまとめ方になりつつあった。

グループの意見の発表では、最初のグループが4段落から12段落までが「なか」と発表した。これは前単元の「めだか」のまとめと異なるものであった。「めだか」は最後の段落のみが「おわり」であり、多くの児童がそのような考えていたのである。その結果、もう2分間だけグループでの話し合いを行うことになった。

T:では聞いてみましょう。
C4:「まとめ」はこれからの絵文字。
Cn:ああ。
T:「これからの」って言葉を使ったわけね。ちなみに、この分け方同じだよって言う人。
(2名挙手)
C5:4から14までが「なか」です。なまえはつけていません。
C6:「なか」を2つにわけた。4から12までを「特長と例」、13と14がこれからの絵文字の使われ方。
T:はい、では3種類意見があります。どれだろうね。どれまでが「なか」だろうね。
C5:14までが「なか」。
C2:「これからの」ってことだから、未来のことだから、絵文字の特長とはまた別だから。

ここで、教師が一つ一つの形式段落の意味を押さえ、まとめに入ろうとした。ところが、まだ納得しない児童が次のような発言をする。

C5:13と14は、「めだか」の「なか1」「なか2」みたいに、分けた方がいいと思います。
T:ああ、こう分けた方がいいんだ。
C7:3つに分けた方がいいっているのに、「なか」を2つに分けたら、4つになるよ。
T:そうだね。今日は3つに分けようね。
T:じゃあ、終わりにはどんなことが書かれていましたか?
Cn:筆者のメッセージ。
T:「なか」のまとめをしているの?
Cn:そう。
T:じゃあさ、13と14に筆者のメッセージが入っているかどうか確認します。

ここで教師は「成り立ちません」という言葉を用いて、13、14が筆者の意見であることを確認していく。教師の巧みな切り返して児童は納得し、意味段落の分け方の指導は終えるのである。

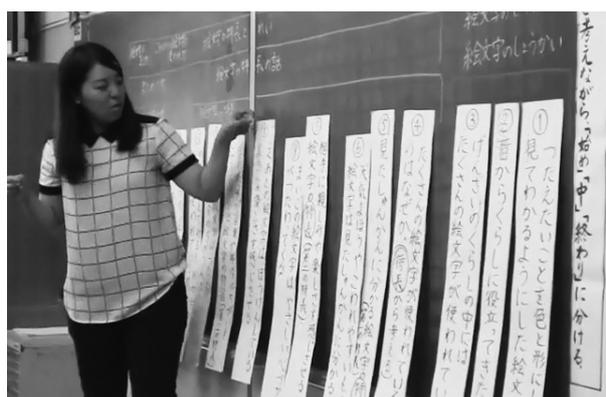


図3 まとめの様子

このY教諭の実践は多くの示唆と同時に強い問いを投げかけている。児童の発言をたくみにつなぎながら、本時は終えることができた。しかし常にそうした実践が可能であろうか。これは授業力

の高いY教諭が学年で取り組んだ成果であると言えるのではないかということである。

(2) Y教諭の実践から学ぶこと

では、平凡な教師はどうすれば良いのか。

実は授業導入部の一人学びのワークシートで、Y教諭が狙う分け方をしている児童がいた。13から15までを「おわり」としている児童である。机間指導において、こうした児童を発見するのは我々でも可能である。そこで、グループの話し合いの前に、自分の考えを発表する場を設けたらどうだったであろうか。大多数の意見の後で、13から15までを「まとめ」とした児童を発表させるのである。そうすると聞いている児童には問いが生じる。「何故彼はこのように考えたのだろうか」という問いである。それをグループの話し合いの視点にしたらどうかと言うことである。「なぜAさんは、こんな風に分けたのだろうか？グループで理由を考えてみよう」と投げかけるのである。そうすると、13から15までがまとめという前提で話し合いが成されていく。そのさい、手がかりとなるのが「事実」と「意見」である。「これからの絵文字」というのはまさにその事を象徴している。結果論であるが、こうした指導であれば、時間を短縮して同様の学習ができたかもしれない。浮いた時間を学習の感想に使うのである。感想は短くて良い。「〈今日はたくさんの先生が見学にいらしていました。だから〉この続きを書きなさい。」程度でよい。話し合い学習の後には時間が残されていない場合が多い。また条件作文には苦手意識が高いため、中学年では、1文程度から取り組ませてよいのである。「今日はたくさんの先生が見学にいらしていました。だから緊張しました。」という感想があるかもしれないし、「だから楽しかったです」という感想があるかもしれない。「だから嫌だったです」も当然予想される。

「今日はたくさんの先生が見学にいらしていました」は「事実」である。「だから」以降はそれぞれの児童の「意見」である。同じ「事実」から

でも様々な「意見」が存在することを児童はまとめの短い時間で学ぶことができる。いわゆる筆者の多様なものの見方・考え方について、考えることができるのである。

このように、A小学校のY教諭と3学年の先生方の優れた取組は、多くの示唆と今後の説明的文章教材指導の展望について示してくれた。段落分けの指導においては、観点によって様々な分け方があるため、グループでの話し合いにおいては一定の視点が必要になってくる。そうすることでスムーズに話し合いが展開される可能性のあることを考えさせてくれた授業実践であった。

参考文献

『国語教育指導用語辞典』教育出版

注)

- 1) 『小学校学習指導要領』H20 P21
- 2) 同上 P23
- 3) 『小学校学習指導要領解説 国語編』H20 P63
- 4) 同上 P64